Osaka University Knowledge Archive

Title	関西方言の命令形式に接続する終助詞 : 助詞「イナ」「イヤ」の歴史
Author(s)	森, 勇太
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 278-265
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90800
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

関西方言の命令形式に接続する終助詞

――助詞「イナ」「イヤ」の歴史――

森　　勇　太

1　はじめに

現代の関西方言では、連用形命令やテ形命令が多く用いられる。これらの形式は共通の終助詞ナ・イナ、ヤ・イヤに接続して用いられることがあり（牧野 2009、高木 2018 等、これらの形態論的解釈については 2 節で述べる）、（1）のように複雑な組み合わせとなっている。

（1）［イキ　［イキヤ　［イキ］ーヤ　［イキナ　［イキ］ーナ
　　［イッテ　［イッテヤ　［イッテ］ーヤ　［イッテナ　［イッテ］ーナ

さて、連用形命令の出現は近世期、宝暦以降とされるが（村上 2003）、出現した当初から現代と同じ助詞の承接が見られるわけではない。（2）のように「連用形＋イナ」は用例があるが、（3）のような「連用形＋イヤ」は見られない。

（2）　あすまで<u>まちいな</u>　（風流裸人形、京都：⑧280［1779］）

（3）　いいかげんに、はよ<u>イキーヤ</u>　（現代大阪方言の作例）

本稿では、近世後期以降の上方・関西方言における命令形式（連用形命令・テ形命令・命令形命令）と、助詞ナ・イナ、ヤ・イヤとの承接の歴史について考える。特にイヤが成立した背景について、イナとの関係から考えたい。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では、先行研究をもとに、現代語の命令形式と命令形式に接続する終助詞のふるまいについて整理する。3 節では近世期、4 節では近代（明治～昭和戦前）について、終助詞のふるまいと、命令形式との接続について述べる。5 節では歴史的変化の要因について考える。最後の 6 節はまとめである。

2　現代関西方言の命令形式と終助詞

2.1　ナとイナの解釈

先述したように、現代大阪方言の連用形命令にナが接続するように見えるときに

は、無核形式（[イキナ）と有核形式（[イキ]ーナ）がある。有核形式は、「前接語の長呼＋低接ナ」と解釈されることもあるが、高木（2018）は、アクセント核が長呼の前で必須であることが説明できないとして、「[イキ]ーナ」、「[イッテ]ーナ」の長呼を後続の助詞の一部と解釈し、その基底形をイナと考える。

（4）　[イッテ]ーナや[イキ]ーナを「前接語の長呼＋低接ナ」と分析した場合、なぜ低接のナが前接語の長呼を必要とするのか、そしてなぜナの直前ではなく長呼したところでピッチが下がるのか、ということが説明できない。通常、低接の助詞が前接語の長呼を要求することはないし、アクセントの下がり目はその助詞の直前に置かれるはずだからである。一方、これを「前接語＋イナ」と分析すれば、前接語の長呼にみえる部分は、上述のとおり母音連続による長音化と解釈できる。またイナの直前にアクセントの下がり目が来ることについても、イナが低接のアクセントを持つためと説明できるのである。　（高木 2018：41）

郡（2020）の助詞の接続記述と、高木（2018）の記述に従えば、大阪方言の命令形式には順接のナと低接のイナがあることになる。(1)

2.2　命令形式と終助詞との接続

現代大阪方言の命令形式に接続する終助詞には、ナ・イナのほかにヤがある。ヤも「前接語の長呼＋低接ヤ」に見える形式があることは同様であるが、アクセント核の位置は説明できないため、有核形式は「前接語＋低接イヤ」とすることが妥当であると考えられる。

（5）a　無核形式　平調　[イキヤ　[イッテヤ　（順接ヤ）
　　b　有核形式　下降調　[イキ]ーヤ　[イッテ]ーヤ　（低接イヤ）

現代大阪方言の命令形式と終助詞との接続を表 1 に示す。表 1 は、3 節以降で文献資料から用例を検討する前段階の整理として、活用別に助詞との承接の様相を示した（森 2020）。表の各欄には、それぞれの活用形の動詞について、動詞部分が連用形の形をとるか、命令形の形をとるか、アクセントが無核か、有核かという観点から、理論的に想定される形式を書き出し、現代大阪方言話者の容認度を示している。*は、多くの話者がその形式を使わないと回答すること、?は話者によって容認しないことがあることを示す。また、語幹一音節の上一段動詞・サ変動詞・カ変動詞は、短呼の場合、一拍相当の長さの中でアクセント核をもつことは想定できないため、表中では（欠）としている。#の形式は禁止として解釈される。

連用形命令の無核形式について、短呼形（「カ[キ」「カキ[ヤ」等）はすべての活

表１　現代大阪方言の命令形式と終助詞の承接

活用	動詞	連用				命令
		無核		有核		
五段	書く	カ[キ カキ[ヤ カキ[ナ	?カキ[ー ?カキー[ヤ ?カキー[ナ	*カ]キ *カ[キ]ヤ #カ[キ]ナ	*カ[キ]ー カ[キ]ーヤ カ[キ]ーナ	カ[ケ]] カ[ケ]ヤ *カ[ケ]ナ
サ変	する	[シ [シヤ [シナ	[シー [シーヤ [シーナ	（欠） *[シ]ヤ #[シ]ナ	*[シ]ー [シ]ーヤ [シ]ーナ	[セ]ー [セ]ーヤ *[セ]ーナ
カ変	来る	[キ キ[ヤ キ[ナ	?キ[ー キー[ヤ キー[ナ	（欠） *[キ]ヤ #[キ]ナ	*[キ]ー [キ]ーヤ [キ]ーナ	[コ]イ [コ]イヤ *[コ]イナ
一段	起きる	オ[キ オキ[ヤ オキ[ナ	?オキ[ー ?オキー[ヤ ?オキー[ナ	*[オ]キ *オ[キ]ヤ #オ[キ]ナ	†オ[キ]ー †オ[キ]ーヤ オ[キ]ーナ	†オ[キ]ー †オ[キ]ーヤ *オ[キ]ーナ
	見る	[ミ ミ[ヤ ミ[ナ	?ミ[ー ミー[ヤ ミー[ナ	（欠） *[ミ]ヤ #[ミ]ナ	†[ミ]ー †[ミ]ーヤ [ミ]ーナ	†[ミ]ー †[ミ]ーヤ *[ミ]ーナ

用で存在する。一方で、長呼形（「カキー[ヤ」等）は話者によって容認されない。このことから、連用形命令自体の基本的な形式は短呼であり、場合によって韻律的に伸びることもあるものと解釈できる。

イナ・イヤとの接続について、五段動詞を確認すると、「*カ[ケ]ナ／*カ[ケ]ーナ」は許容されないため、イナは命令形命令に接続できず、一段動詞「オ[キ]ーナ」（起きる）は「連用形＋イナ」と解釈できる。しかし、助詞ヤは命令形命令に接続できるため、「オ[キ]ーヤ」（起きる）は「命令形命令の長呼形＋ヤ」か、「連用形＋イヤ」かを判断できないことになる（当該形式に†をつけている）。

2.3　近年の変化―イヤの成立

このような命令形式と終助詞の接続のあり方は、通時的に同じ形が保たれてきたわけではなく、変化が見られている。

まず（６）に、前田（1961）が挙げる連用形命令の形式を示す。引用元ではアクセントが傍線で示されているが、ここでは本稿の表記に統一した。

（６）　言い　言い（[イイ）男女共用
　　言いいな（[イイ]ーナ）同
　　言いで（[イイ]デ）女専用
　　言いや（イイ[ヤ）男女共用[2]　（前田 1961：129-130）

ここからは、この記述の段階で、連用形命令にイナは接続するが、イヤは接続し

ないということが示唆される。なお、否定疑問形イワンカイにはヤが接続するが、前田（1961）はこれを男性専用の卑語的な表現としている。

また、村中（2001）では、1998年に行われた命令表現に関する質問調査の結果が示されている。このうち「選択式質問調査」では、20代から60代以上までの話者、計53名の調査結果が示されているが、「読む」の「連用形＋イナ」形となる「ヨミーナ」は、「年代男女に関わらず広く使われるもの」とされているのに対し、「ヨミーヤ」は「男性は広く、女性は中年層以下にかたよっているもの」とされている。[(3)] 村中（2001）では、この調査結果と、前田（1961）をはじめとした先行研究に基づいて、「おそらく、40年ほど前まで、大阪方言の命令表現においては、イヤはイナほどには使われていなかったのであろう。」とし、「文末のイヤは、乱暴な響きを保ちつつ、柔らかいニュアンスの後にも付くようになり、大阪方言においては使用が広まってきているといえよう」と述べている。以上の先行研究からは、「連用形＋イヤ」の例が広く見られるようになったのが、1960年代～1990年代のあいだであると推測される。

2.4　調査の概要

2.4.1　問題の所在

先行研究からは、イナ・ヤと比較して、イヤが後発のものであることがわかった。そのことを踏まえて、本稿では、命令形式と終助詞との接続が近世後期以降どのように変化しているのかを検討したい。具体的には、連用形命令は宝暦以降に形成されたとされる（村上 2003）ので、近世後期以降の連用形命令・命令形命令と終助詞ナ・イナ、ヤ・イヤの接続のあり方について調査する。助詞のふるまいの観察をするためには、命令表現だけでなくその助詞の用法を広く見ておく必要があり、本稿においては、特にイナの各時代の用法についても検討する。

問題点として、歴史資料からは音調がわからないこと、また、表記に長呼が厳密に反映していない可能性があるという点が挙げられるが、表記形から見えることについて検討していきたい。

2.4.2　調査資料

使用した資料を（７）に示す。

（７）a　近世後期：『日本語歴史コーパス江戸時代編Ⅰ洒落本』の京都・大坂板作品。

b　近代・関西落語：真田・金澤（1991）所収SPレコード文字化資料、五

代目笑福亭松鶴（編）（1936-1940）『上方はなし』。

c　近代・関西小説：木村（1981）、藤本（1981）、竹村（2009）によって選定した23作品。

現代の大阪方言との連続を考えるためには、京都と大阪（大坂）の差異には留意すべきであるが、大阪のみでは量が十分ではないため、まず、京都と大阪を合わせて検討し、必要に応じて地域の差異について考察を加えることとする。

3　近世後期のナ・イナとヤ・イヤ

3.1　イナのふるまい

近世後期のイナは、前接語の種類が多様で、間投的にふるまう。まず、命令表現以外に接続するものを見る。文末、他の終助詞、接続助詞句・格助詞句・副助詞句などの副詞的成分、また、副詞・接続詞・感動詞にも接続する。

（8）a　あなたはどふしやふいな［動詞述語（意志形）］
（短華藻葉、大坂：⑬285［1786］）

b　今度は何になるいナア［動詞述語（終止連体形）］
（嘘之川、京都：㉓75［1804］）

c　はだか人形はどのくらゐなが能イナ［形容詞述語］
（嘘之川、京都：㉓81［1804］）

d　〔亀〕アノこちらむいて見イ〔どん〕ヘイこふかナ〔梶〕ヱヱこちらをいな［格助詞句］　（粋の曙、大坂：㉖295［1820］）

e　申申。これいな。又いな。またたぬきねいりなんする［感動詞／副詞］
（陽台遺編・妣閣秘言、大坂：③19［1758］）

f　〔半〕コヲトまちや。なんばの、ひぜんゆでかいな〔みつ〕イヤイナ。よふおぼへていじや［終助詞／感動詞］（短華藻葉、大坂：⑬286［1786］）

イナは疑問文や疑問詞に接続する例が多く、命令表現に接続することも考えると、聞き手に対する働きかけの際に使われることが多いといえる。

3.2　命令形式との承接

3.2.1　終助詞との承接と長呼・短呼の関係

次に、表 2 で連用形命令・命令形命令と終助詞の承接を見る。表 2 では、各活用の動詞について左から「連用形短呼および連用形＋ヤ・ナ」「連用形長呼および連用形＋イヤ・イナ」「命令形および命令形＋ヤ・ナ」で想定される形式を並べ、その

表 2　近世後期における連用形命令・命令形命令と終助詞の承接関係（表記形）

活用	動詞例	連用		命令
五段	書く	27カキ 22カキヤ 3 カキナ	－カキイ －カキイヤ 26カキイナ	29カケ －カケヤ －カケナ
サ変	する	1 シ 3 シヤ －シナ	1 シイ －シイヤ 7 シイナ	3 セイ/セエ －セイヤ/セエヤ －セイナ/セエナ
カ変	来る	－キ －キヤ －キナ	－キイ －キイヤ －キイナ	7 コイ －コイヤ －コイナ
一段	起きる 終止形 3音節以上	9 オキ 6 オキヤ －オキナ	5 オキイ －オキイヤ 1 オキイナ	
	見る 終止形 2音節	2 ミ 6 ミヤ －ミナ	12ミイ 1 ミイヤ －ミイナ	

用例数を示したものである。挙げている語はあくまで語例であり、該当する活用・終助詞との承接のものをすべて計上している。

3.2.2　イナ・イヤとの承接

イナについては、「来る」、および短い下一段動詞を除き、「連用形＋イナ」がすべての活用の種類に見られる。

（9）a　あすまでまちいな　（風流裸人形、京都：⑧280［1779］）

　　b　エエ外のとかへてやりいナア。　（色深狭睡夢、大坂：㉗328［1826］）

これ以外の命令表現として、敬語の命令形（「オ＋動詞連用形」を含む）や否定疑問形に接続するものもある。(4)

（10）a　下リなはいいな　（興斗月、京都：㉙134［1836］）

　　b　マアちよつとおかへりいナア　（嘘之川、京都：㉓66［1804］）

（11）　サアお市さん奥へ往んかいな　（南遊記、大坂：⑱190［1800］）

イヤについて、五段動詞・サ変動詞・カ変動詞には「連用形＋イヤ」の確例は存在しない。1 例ある「ミイヤ」の類（実際の用例は「寝る」、『嘘の川』）も「命令形命令＋ヤ」と考えることができる。

3.2.3　ナとの承接

「連用（短呼）＋ナ」（「カキナ」）は 3 例あったが、すべて京都板の洒落本であった。『風流裸人形』（1779年）、『嘘の川』（1804年）、『箱枕』（1822年）である。この

うち、(12) の『風流裸人形』の例は、「言う」の連用形命令にナが接続しているように見える例である。

(12)　あすのばんにおいでるやふにいいな(風流裸人形、京都：⑧280［1779］)

ただし、「言う」は連用形が「イイ」と同音連続（あるいは「イー」という長音）になることに注意が必要である。村上（2002）などに指摘があるとおり、近世期では、「言う」の連用形に敬語「やる」「や」が接続したときに、「いいや」ではなく「いや」で表記されることがある。

(13)　つぶつぶいやんなやかましい。先づ来ていはや

（近松浄瑠璃、五十年忌歌念仏：137［1707］）

下一段活用動詞に「や」が接続した場合には、融合した形式になることから、これは表記形の上の改変ではなく、音声変化を反映していると考えられる。

(14) a　〔お吉〕「お清よ、父様が見えたら母に知らしゃや」［下一段活用助動詞「せる」＋「や」、「ゃ」の小字は校訂による］

（近松浄瑠璃、女殺油地獄：399［1721］）

b　〔花車つや〕「とよなぜ奥へやりましやらんぞいの。サア御こたつへ火をいりや。マア奥へおいなはれ」［下一段活用動詞「入れる」＋「や」］

（月花余情、大坂：③109［1757］）

「言う」の連用形にイナが接続していたとすると、「イイイナ」となるが、イが続くことによる音声の縮約は十分考えられる。これを踏まえると、(12) の「いいな」は「連用形＋イナ」と解釈でき、「連用形＋ナ」は、特に大坂において本来的な用法ではなかった可能性がある。

五段動詞の「連用形＋イナ」は26例あり、京都にも大阪にもある。

(15)　ちつとめをさましいな。　（短華藻葉、大坂：⑬290［1786］）

3.2.4　ヤとの承接

調査範囲では「命令形命令＋ヤ」(「カケヤ」) の例は見られないが、18世紀前半の近松浄瑠璃では「命令形＋ヤ」が存在する。現代でも「命令形＋ヤ」が存在することから、当時もまったく存在しなかったわけではないと考えられる。

(16) まづまづ休めゃ　（近松浄瑠璃、五十年忌歌念仏：132［1707］）

4　近代のイナとヤ

4.1　イナの文法的性質

近代（明治～昭和戦前）においても、イナは前接の要素の種類が多様で、間投的に用いられている。文末のほか、格助詞句、副詞にも接続する。

(17) a　「焚くお米がどこにあるいな。」［動詞述語（終止連体形）］
（上方はなし、鮑貝［1936-1940］）

b　オイ、市助はどうしたいな。［動詞述語（過去形）］
（上方はなし、市助酒［1936-1940］）

c　サイナあれが島三郎の馴染んでいた女じゃといな、エエ、婆さん昔から歌にいうてあるな、［格助詞句］
（上方はなし、吉野狐［1936-1940］）

d　「ほんまにイな」［副詞］　（わが町、織田作之助：263［1943］）

命令表現以外との承接について、最も用例数が多いのは、終助詞「カイナ」として使われる用法である。終助詞に接続する用法としては、「ワイナ」もある。

(18) a　「阿呆かいな。」　（ぼんち、岩野泡鳴：107［1913］）

b　これかて本真の盲やらどや分れへんわいな。
（さとり坊主、初代桂枝雀［1923］）

4.2　命令形式との承接

4.2.1　終助詞との承接と長呼・短呼の関係

表 2 にならって、近代の連用形命令・命令形命令との承接の様相について表 3 に示す。連用形命令・命令形命令自体の使用頻度が低いために、現代語に見られる形式もすべてが見られるわけではないが、使用した 2 つの資料に五段動詞の「連用形＋イヤ」（「カキイヤ」）は見られない。

4.2.2　イナとの承接

「連用形＋イナ」は、用例の多い五段動詞、サ変動詞、一段動詞に見られる。

(19) a　「そない言はんと、まア、聞きいな」　（父親、里見弴：297［1920］）

b　「さうか、そんならまア、勝手にしいな」（父親、里見弴：294［1920］）

その他の命令表現として、敬語形式や禁止形式と接続する例がある。

(20) a　姉さんいっしょに行っとくなはれいな

表 3　近代における連用形命令・命令形命令と終助詞の承接関係（表記形）

活用	動詞例	連用		命令
五段	書く	11 9 カキ	5 9 カキイ	41 － カケ
		2 5 カキヤ	－ － カキイヤ	－ － カケヤ
		－ － カキナ	1 5 カキイナ	－ － カケナ
サ変	する	－ － シ	2 2 シイ	6 － セイ/セエ
		－ － シヤ	－ 2 シイヤ	－ － セイヤ/セエヤ
		－ － シナ	－ 1 シイナ	－ － セイナ/セエナ
カ変	来る	－ 1 キ	－ － キイ	10 － コイ
		－ － キヤ	－ － キイヤ	－ － コイヤ
		－ － キナ	－ － キイナ	－ － コイナ
一段	起きる	－ － オキ	2 － オキイ	
	終止形	－ 1 オキヤ	－ － オキイヤ	
	3音節以上	－ － オキナ	－ － オキイナ	
	見る	8 1 ミ	19 11 ミイ	
	終止形	－ 2 ミヤ	2 1 ミイヤ	
	2音節	－ － ミナ	1 1 ミイナ	

用例数の左側は落語資料、右側は小説資料の結果を示す

（上方はなし、子は鎹［1936-1940］）

b　な　おかしい物言いしいないな、山子かやなん（て）。

（煙管返し、初代桂枝雀［1903］）

4.2.3　ナとの承接

近代のナに関して、調査範囲には用例がなく依然として大阪で一般的に用いられていたとは考えにくい。ただし、金澤（1998）所収の桂春団治落語（1951-1952 年収録）には、(21) のように「連用形＋ナ」が見られている。

(21)　〔喜六〕「うん。行ってくるで。」〔奥さん〕「あ、ちょっと待ちな、ちょっと待ちな。慌てんでもよろしがな、バタバタバタバタと。」

（祝いのし、桂春団治：102-103［1951-1952］）

4.2.4　ヤとの承接

「連用形＋ヤ」については、五段動詞・一段動詞に見られる。

(22)　阿母さんのいふことを、よう覚えときや。（天満宮、上司小剣：250［1914］）

「カ変動詞連用形＋ヤ」が見られなかったのは、全体の頻度が低かったためであろう。「サ変動詞連用形＋ヤ」の例はなかったが、「シイヤ」が見られることが注意される。このことについては、4.2.5 節で改めて述べる。

4.2.5　イヤの可能性がある例

「連用形＋イヤ」と見うる形式があるのは「サ変動詞連用形長呼＋ヤ」（「シイヤ」）と「一段活用連用形長呼＋ヤ」（表 3 の「ミイヤ」）である。現代関西方言では、1 音節語が 2 モーラで発音されやすい傾向にあり（郡（編）1997）、形態論上「連用形長呼＋ヤ」の可能性があって、イヤの確例とは言えない。

次に意味の面を考える。現代関西方言において、命令形式が有核で発話されるか、無核で発話されるかは、井上（1993）の「矛盾考慮」か、「非矛盾考慮」かということと関連している。「矛盾考慮」とは、話し手の意向通りに事態が進行していない、として聞き手にその修正を求める行為指示であり、現代関西方言では有核の形式が担う。一方、無核の表現はそのような修正の意図はない「非矛盾考慮」の表現である。

(23) a　10時になったら仕事を始めてください。［非矛盾考慮］

b　［事前に（23a）を伝えていたにもかかわらず、10時になっても仕事を始めていない場面］10時を過ぎているので仕事を始めてください。［非矛盾考慮］

これを踏まえて「シーヤ」の 2 例を確認する。(24a) は道臣が事情を知らない竹丸に対して、「阿母さん」に近づかないように命じるものであり、非矛盾考慮といえる。(24b) も義父は、「すぐ帰ってくるようにする」ことが発話時時点で行われているべきだと認識していたとは解釈できず、非矛盾考慮といえるだろう。

(24) a　道臣は袴も脱がずに窃と竹丸を小手招きして、便所の横の戸棚の前へ連れて行き、「阿母さんは無茶いふよつて、あんまり側へ寄らんやうにしいや。竹、竹いうて呼んでも、聞えん風してるのやで。」と小ひさい声で言つた。

（天満宮、上司小剣：248［1914］）

b　操市ははじめから［義父の話を］碌に聴いてもゐなかつたが、東京ゆきはとても駄目だと観念すると、せめてこれだけはと、毀れものに触れるやうにして妹の三年忌に参つてきたい旨をのべると、今日発つとはまた急なことやなと大分不服を並べてから、これだけは

〔義父〕「まあそやつたら直ぐ帰つてくるやうにしいや。」

で不承不承許してくれた。　（暖簾、真下五一：140［1939］）

下一段動詞についても、基本的に非矛盾考慮で解釈できる例である。ただし、(25) については、矛盾考慮の解釈も可能である。

(25)　［京子は「子宮病」からヒステリーを起こして寝込んでおり、夫の道臣が看病している。お時が見舞いに来たが京子はお時を認識できず、それどころか悪態をつく。］

〔京子〕「またあんなことをいうて騙すのや。……千代さんとこのお時さんは、天神さんのお姫さんになつて、斎世親王と牛車の中でな、……ほほほほほ。」と、京子は若い娘のするやうに、科を作つて、寝衣の袖で羞かしさうに、脹れた顔を掩うた。〔道臣〕「何いうてるんや。……京子、お前気を確かに持つて、ゆつくり考へてみいや。お前は夢でも見てるんやらう。」道臣は物静かに、よく分らせようとして言つたけれど、［略］

（天満宮、上司小剣：251［1914］）

道臣はこの発話によって京子を諭すのであるから、「ゆっくり考える」というのはこれからのことであり、そのように解釈すればこの行為指示は非矛盾考慮といえる。ただし、京子の言っていることが間違っているという確信のもとであれば、矛盾考慮でもおかしくない。同じ発話に「何いうてるんや」「確かに」などとあることから、それらも話し手の考えが正しいと認識していて、修正させようとする矛盾考慮の意図と見ることもできる。ただしここでは、非矛盾考慮も十分に考えられることから、必ずしも矛盾考慮の例と考えなくてもいいと考えておく。

以上のことから、意味・運用の面からも、これらの「シーヤ」「ミーヤ」の例を有核と考える必然性は薄いといえる。これによれば、近代に「連用形＋イヤ」の確例はないことになる。

5 「連用形＋イヤ」の成立

2.3節で見たように、「連用形＋イヤ」の例が広く見られるようになったのが、1960年代～1990年代のあいだであると推測される。「連用形＋イヤ」が成立するという歴史的変化は、無核形式で「連用形＋ナ」と「連用形＋ヤ」が並立していることから、有核形式でもそれに並行してヤとナが対立する形式を形成するため、「連用形＋ヤ」「連用形＋イナ」が混交して「連用形＋イヤ」が成立したと説明できる。本稿では、形態論上の分析として「イヤ」「イナ」という形式を想定してきたが、現代大阪方言話者の感覚としては、「イナ」はひとまとまりの終助詞というよりも、「連用形の長呼＋ナ」という認識があるという。このように「イナ」が「連用形長呼＋ナ」と認識されていることも「連用形長呼＋ヤ」（「連用形＋イヤ」）の成立を容易にした要因であると考えられる。

それでは、なぜ「連用形＋イヤ」が成立したのだろうか。これについては、まだ十分に調査が及んでいないが、関西方言における「イナ」の用法の偏りを考えたい。「イナ」は近世期からもともと疑問文で使用されることが多かったが、近代以降、命令表現に接続するもののほかは「カイナ」に用法が偏っており、本稿の近代の資料

（戦前期）では、命令表現を除いた265例中197例が「カイナ」で用いられている。戦後の関西小説作品[5]ではさらのその偏りが強まり、「イナ」は命令表現と「カイナ」でしか用いられない。「カイナ」の用法自体は、問いかけ・疑い・反語というカの持つ用法でいずれも用いられている。

（26）a　「何がええねんな。顔かいな、あそこがかいな。」［問いかけ］

（泥の河、宮本輝：42［1977］）

b　「福島……福島？あれ休みかいな、珍しいなあ」［疑い］

（浪速少年探偵団、東野圭吾：12［1988］）

このようになると「イナ」自体に広い意味での疑問の意味が感じられるようになると考えられる。しかし、命令表現を用いるときには、聞き手の意向に関わらず強制的に行為を実行させようとするときがあり、その際に疑問の意味はふさわしくない。もともと命令形命令には終助詞ヤを付加して、強制的な命令を表すことができていたので、それを連用形命令でも可能にすべく、「イヤ」が生み出されたという過程が想定できる。

6　まとめ

3節・4節で見たように、近世・近代において「連用形＋ヤ」「連用形＋イナ」は存在していたが、「連用形＋イヤ」の確例はない［3.2節・4.2節］。イナは近世において文や連用成分、感動詞等にも接続する間投的な終助詞で、疑問文で用いられることが多かった［3.1節・4.1節］が、近代以降用法が狭まり、命令表現以外ではほとんどが「カイナ」の例となる。このことによりイナに疑問の意味が焼き付き、強制力の強い命令で用いにくくなったため、それを補うべくイヤが生まれたと考える［5節］。

近年、方言終助詞の意味用法の記述が進んでいるが、歴史的な観点からの記述や通時的変化の解明が必要になるだろう。これについては今後の課題としたい。

注

（1）湯澤（1936）には、“「いな」は「い」と「な」と複合した感動助詞（同：538）”とあり、すでにイナを複合終助詞とする解釈が示されている。

（2）「言いや」のアクセント（イイ［ヤ）は前田（1961）に拠る。この例について、前田（1961：129）では「語尾のヤは、必ず尻上がりのイントネーション（語調）で発音される」と観察されている。

（3）村中（2001）では、調査された50代以上の話者12名のうち「ヨミーヤ」を使用するのはわずか2名であることが示されている。

（4）終助詞イは他の終助詞を後接させて用いることが多いが、否定疑問形にイのみが接続

する命令表現もあった。

［ｉ］マア何ぞ御吸物出さぬかい　（月花余情、大坂：③110［1757］）

（５）作品の選定に際しては工藤（編）（2003）を参照した。

資料

近松浄瑠璃　重友毅（校注）（1958）『近松浄瑠璃集上』日本古典文学大系49、岩波書店

洒落本　『聖遊郭』『月花余情』『新月花余情』『陽台遺編・妯閣秘言』『風流裸人形』『短華蘂葉』『晩のすじ書』『うかれ草紙』『阿蘭陀鏡』『十界和尚話』『南遊記』『嘘の川』『竊潜妻』『粋の曙』『箱枕』『北川蜆殻』（『洒落本大成』中央公論社）、国立国語研究所（村山実和子ほか）編（2019）『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅰ洒落本』https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/edo.html#shareVer.1.0、2019年４月１日確認

関西落語　真田信治・金沢裕之（編）（1991）『二十世紀初頭大阪口語の実態―落語SPレコードを資料として―』平成二年度文部省科学研究費補助金成果報告書／金沢裕之（1998）『二代目桂春団治「十三夜」録音文字化資料』平成十年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書／五代目笑福亭松鶴（編）（1936-1940）『上方はなし』三一書房、調査作品は「猿後家」「人形買」「たちぎれ線香」「子は鎹」「市助酒」「天王寺詣り」「借家階段」「貝野村」「口入屋」「鮑貝」「吉野狐」

関西小説（戦前）　高濱虚子『風流懺法』『続風流懺法』『風流懺法後日談』『大内旅宿』（『明治文学全集』筑摩書房）、長田幹彦『蜘蛛』『雛勇』『祇園しぐれ』（『長田幹彦全集』日本図書センター）、近松秋江『黒髪』『狂乱』『霜凍る宵』（『近松秋江全集』八木書店）、佐々木茂索『兄との関係』『父子一面』（『現代日本文学大系』筑摩書房）、真下五一『暖簾』（『ふるさと文学館【京都Ⅰ】』ぎょうせい）、川端康成『古都』『十六歳の日記』（『川端康成全集』新潮社）、水上勉『越前竹人形』（『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社）、岩野泡鳴『ぽんち』、上司小剣『鱧の皮』『天満宮』、宇野浩二『長い恋仲』、里見弴『父親』、水上瀧太郎『大阪の宿』、武田麟太郎『釜ヶ崎』、藤沢桓夫『大阪の話』（以上『現代日本文学大系』筑摩書房）、織田作之助『わが町』（『底本織田作之助全集』文泉堂書店）

関西小説（戦後）　山崎豊子『船場狂い』『花のれん』（『山崎豊子全集』新潮社）『ぽんち』（新潮文庫）、宮本輝『泥の河』（新潮社）、東野圭吾『浪速少年探偵団』（講談社文庫）『あの頃ぼくらはアホでした』（集英社文庫）、岩阪恵子『淀川にちかい町から』（講談社文庫）、佐藤愛子『結構なファミリー』（集英社文庫）

句読点を付す、踊り字をひらくなど本文表記を改めたところがある。

参考文献

井上優（1993）「発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」―命令文・依頼文を例に―」『国立国語研究所報告105研究報告集』14, pp.333-360, 国立国語研究所

木村東吉（1981）「近代文学に現れた全国方言　近畿（一）」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会（編）『藤原与一先生古稀記念論集Ⅱ―方言研究の射程―』pp.406-419, 三省堂

工藤真由美（編）（2003）『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究No. 5 大阪（小説用例）編』科学研究費成果報告書、大阪大学大学院文学研究科

郡史郎（編）（1997）『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』明治書院
郡史郎（2020）『日本語のイントネーション―しくみと音読・朗読への応用―』大修館書店
高木千恵（2018）「大阪方言の行為要求表現における終助詞ナの共起と前接語の長呼について」日本方言研究会（編）『方言の研究』4, pp.21-49, ひつじ書房
竹村明日香（2009）「ハル敬語の形態変化の通時的考察―大阪・京都の比較を通して―」『待兼山論叢 文学篇』43, pp.21-36, 大阪大学大学院文学研究科
藤本千鶴子（1981）「近代文学に現れた全国方言　近畿（二）」藤原与一先生古稀御健寿祝賀論集刊行委員会（編）『藤原与一先生古稀記念論集Ⅱ―方言研究の射程―』pp.419-431, 三省堂
前田勇（1961）『大阪弁入門』朝日新聞社
牧野由紀子（2009）「「大阪方言の命令形」に後接する終助詞ヤ・ナ」『阪大日本語研究』21, pp.79-108, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
村上謙（2002）「近世後期上方における「動詞連用形＋や」について―連用形命令法と助動詞ヤルとの関連―」『国語国文』71-6, pp.1-15, 京都大学国語学国文学研究室
村上謙（2003）「近世後期上方における連用形命令法の出現について」『国語学』54-2, pp.45-58, 国語学会
村中淑子（2001）「大阪方言における命令表現について―臨地調査と文献資料比較―」『徳島大学国語国文学』14, pp.28-16, 徳島大学国語国文学会
森勇太（2020）「広島県安芸方言の命令形式―大阪方言との対照―」『国文学』104, pp.516-501, 関西大学国文学会
湯澤幸吉郎（1936）『徳川時代言語の研究』刀江書院（引用は1962年復刊、風間書房）

付記

本稿はJSPS科研費（21K00549, 20H00015, 17K13467）の助成を受けている。本稿の執筆に際しては、方言文法研究会昔話研究班のみなさまから多くのご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。